

『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉

吉町, 義雄

<https://doi.org/10.15017/2332940>

出版情報 : 文學研究. 42, pp.127-154, 1951-11-30. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉

吉 町 義 雄

沖で見た時は 鬼島と見たが 来て見りや八丈は 情け島
——八丈節——

鳥も通はぬ東海孤島に保存される古写本に方言語彙若干が潜んでゐるのは自分に取つて永い間可なりの魅力であつた。① 今春待望の島渡りを決行して東京都八丈支庁長室で関係箇所を筆録し得たから是を左に紹介する。便宜と許可を与へられた支庁関係人士に厚く謝意を表す。②

『園翁交語』は美濃紙本であつて表紙に表題の次行に「島役所藏」とあり、表紙の次に無字一丁但し欄外に朱筆で「第五一五号」と見え、次に無罫紙一丁があつて序文が記され、次は本文五十三丁であるが何れも紫色罫線十三行宛表裏の袋綴で折目下に「八丈島役所」と同色に印刷された紙を以て統一され丁付は無い。③

序文は白紙表に大字六行で（「」は改行）

園翁交語

『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉

『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉

予幼。弱而出島矣。丁壯之頃。歸於故鄉。閑暇徒然。以友園。翁而劇談。彌日矣。聞翁之辭。以行其地。視其所斯。亦不
快。樂乎。是故諸事。舛錯。以舉紙。

裏には二行とそして一行明けて一行の計三行に

上將莫忘却故郷之舊也。遂作小冊名園翁交語爾

女護島 高閔慎識

とある。序文最初二字原物は「弔。紗。」と誤写してある。

本文内容は左の様に分れる。

八丈緋之話（一丁オ―五丁オ）

爲朝公之話（五丁オ―十二丁ウ）

島風（十三丁オ―十五丁オ）

八丈島語集（十五丁オ―廿四丁オ）

八丈島ト部渴之本ノ唱（廿四丁オ―廿六丁オ）

八丈島龜ト文事（廿六丁オ―廿八丁オ）

渡海之話（廿八丁オ―卅九丁オ）

小島之話（卅九丁オ―四十二丁ウ）

椰の葉話（四十二丁オ―四十三丁ウ）

江島ぶし（四十三丁ウ―四十六丁ウ）

名産（四十六丁ウ—四十七丁オ）

歸国人名譽話（四十七丁オ—四十八丁オ）

島産人（四十八丁オ—五十二丁オ）

葬式（五十二丁オ—五十三丁オ）

五十三丁オに左三行がある。

干時明治十九年十月寫之 書記 高橋與一

三ツ根村高橋鐵之助殿家藏ニシテ元自分祖父ノ集記」也

さて「八丈島語」に關しては先づ十五丁オ八行から十三行に五つて左の文字が存する。(4)

夫天地之間莫_レ大_ニ於人_一焉人之先要者言路哉言路不通則

難分周旋之用也茲以乎本邦素有成語集而通於邦域可

謂世寶矣故傲之_レ以今輯八丈島語集將使彼民間之語意

速通於 本邦以曉人情敢叙卷端而輔口演爾

享和二年六月上完 女護島逸民識

次に「八丈島語」計百八十五語句は十五丁ウから廿三丁オ六行迄に上下二段一行置に六行宛に、上段から下段へ読んで次行に移る順序で記され、字体は達筆だが変態漢字平仮名は凡て今体に改めておいた。原物を忠実に覆刻し誤記難解と思はれるものには【】内に補註した。島語に当る意味の標語漢字を一々大字太書した所に興味がある。

八丈島語

戸頭トト 自らの父親を云ことばえ

母ハハ 自らの母親を云ことばえ

亞ア姓セイ 兄の事を称して云ことばえ

我ワガ隨ズイ 弟を他人に対して云ことばえ

男子オトコ元服前 一男太郎二男二郎三男三郎四男四郎五男五郎其下之に順ず

女子メノコ惣領 女子と云男女ともに小兒の時は安頭端アツツと云中華にも此三條を孟仲季と云

其次 仲ナカと云又次位露シロと云

其次 程子チヨコ又久壽キウジュ以理イリ又富止フヂ本朝にて末子を「止松末松などとしゆくする如し

具グ頭コウ 夫のことを云

護ゴ世セ 人の女房を云夫の世帯をうけま」もるゆに云 【故に云ふ】

童人ドウジン 小兒の惣名なり

安盛アキセウ 他人の男子を称して云 【以上十五丁ウ】

安寝アキネ伊イ われより年重の婦人をさ」して称す【る】ことばえ

夜陸子ヤリクシ 夫の名を顯しかたく生れたる子」を云父なし子と云ことえ

辞ジズル きゝかへす言葉なり

潜ひそめ ものをかたづける言葉なり

爲おつたら嘔おし おしのことくたまつていろと云「言葉なり

豈あたふおす乎なる爲なる云 なにかいわしやると云言葉又

感かんだ分ぶん 本朝のそうだと云言葉なり」其辭理に当りたるを感するなり

豈あたふおす就たか乎か なに、よつてかと云言葉又 【以上ウ】

豈あんのけ之の解げ干かん左ざ理り さんの故に左様に仰せあるぞ」そふでへないと云言葉なり

毛け經けい不ふ識し / すこしも存せぬと云言葉又

餘よし強じやう除じゆ わるじやれをのそけといふ「言葉なり

尻しん虚のこ 後門のことを云なり

容やう良らう在あ内れ でききずに居ると云こと」なり 【出過ぎず】

惡あひ事こと分たり わるひことだと云言葉なり

破は落らく戸こ 中華にてへ一家を潰すを破落」戸と云此義続きて徒らと云用ゆ

擲てい驢りゆう墮だ轉てん いたづらすぎると云ことなり

手て能の過とが うつわものこわしあやまち」するを云

戲げり良りやう たわむれによしと云所に用ゆ 【今けりよう】

爲かし調す 怠りをなすかと云乙今忘ることに」心得五音のたがいと云へ誤ならん

【以上十七丁オ】

於ニ遠辨知おべんち

わきまへなくものをゆふ」人をそしりて云言葉なり

無ニ射衛むしゃい

おのれのなすべき要【專】をとり失ふ」ものを云

按戲之倍あんげのはい

はがらしひ【馬鹿らしい】と云ことなり

迂奴子於嬌謀うぬがしんぼうに

其方位の器量でと云所ニ用」ゆ罵しる言葉なり

嘲解轉あちげまわす

言葉さだまらず人をあざむかんとするを云

何戲挾理なんのげきり

ものを尋ぬるにそうでへない」と云所へ用ゆ

爲レ豈爲ニ其何卒たいていぞふ

【何故さう】するのだと」云所に用ゆ

爲レ豈而于レ我不ニ彼レ云ニ乎おにせいで

なぜ我に其ことをいわしや」らぬと云言葉なり

欲加法更ほしくかほほう

かななきの当らぬ占いを云に形」容してうそを云ことに用ゆ

無レ免レ座むれまな

思ひやりなく口をきくたわけ」ものといふことなり

盜魂ぬすたま

ぬすみする心根ちやと云所」に用ゆ

白淡嚙しやあぢ

口きく事かづくなる形容を見」てわる口に云ことなり

拂ニ添迷はらひそみ

かりをはろふを云

負ニ増迷おほふま

かりをおぶと云言葉なり

於ニ真好まこと

まことにと云事なり

眞能まんのぶ

まつすぐだと云事なり

『園翁交語』と『八丈実記』の鳥言葉

皆無手 みなむし すもふなとにむそふさに「まけると云言葉なり

貪情 どんぜう 小兒をおどしとんぜうにかませ」と云

赫智 しつち 道理をのけてむりにもと云「言葉なり

被レ呼 よなわ 人をよぶ事なり

増銘 まうめ 牡牛のするときを云

交散 まじりかす ものを失ふを云

右方 うがた あなたと云事

此方 こなた こなたと云事 【以上十八丁オ】

後地 うなじ うしろのくうちと云医家にも「項をうなじと云同意なり

塾巖 とんち こたかき山を云

作ニ重面 ぢうめんをつくる なかんとしてなかね所の「形容なり

憑會戲 ひやうまひ 不図して咄を設るに用ゆ

山穴 やあ 山にあなあるを云

途砂 みさ つちのうへと云事なり

雨瀝滯 あめこへいしち あめしづく出るほとぬれ」と云事

足あし絞しぼ爲な瀝れ しつたうにへいた あめにあふてしほるゝ程ぬれ」と云事
クルシホルナストツク

法吏ほくり 神の笈をおこのふ吏氏の「事」を云

場宿遠ばしゆくとま 家里とをき野原ヲ云

咒まじ 若わか 人をのろふを云

看者遠矣みしやとろし
けんをんとらん 人の見たすけなければあぶな「い所たと云に用ゆ

豊矣ぶゆい いかいと云事

卜部うらべ 神の事をあつかる役を云

豊太ぶふた このうへなきいかいと云事

除外よかせ ものを辞退する言葉なり

揆着もつ 小兒のしめしの事なり

根小矣ねこ ちいさいと云事本邦根つから「葉つからと云如し

上褌うへはらぎ 軍器に上を覆ふ物をほろと云に同「かつきの如く下を隠す上着の事又

遣足やぢ たくさんと云事又人にあたへてもまだ「有ると云氣味に用ゆ

夜帶よおび 晝農を勵み夜よき帯をくる故又「今ハ帯の通称に用ゆ

踏込ふみこ 本朝にて踏通しと云古語ならん中華の犢「鼻禱と云今股引と同じ今用る下帯と云」ハ後世のことと思

ハ

題辞衣だいし
タイスルコトハ うつくしき着ものうつくしき「人に用ゆ

弊へ卑ひ羅ら やぶれつぎたる着物の事なり

【以上十九丁オ】

満多羅またら よき着物の称号なり

文ふ 【語釈欠】

幽卷ゆまき 女のゆもじの事なり

題辭化粧だいにじけわま うつくしくして人の言葉にのせるを云

面晡めんぷ 良倍らうばい 若き女の惣名なり先へ「美目よきを云

耻は 懶らん 父子の中にてさしあいを「云

匹都ひつと 身のさまよくこひたるを云「こしらへすぎたる事なり

眉張まば 十分に氣の付目をひらいて見「たと云形容の言葉なり

獨離どり ひとりと云事

止ひ火と 火をけす事なり

他火出たひで 婦人胥水を見れば別家別次と「なす今は胥水になりしをたび」と云

三日家みつかや 月水あがりて後三日づゝ身を清め「たる家の事なり

子生家こうみや 産所を前にこしらへ置「名なり

圍爐裏いゑり 本朝の爐の事なり

亭てい さしきの事なり

竈席かまどのせき

本朝の炬ふちのそばと云事

身除みよけ

糸籠の事又糸の乱れをいとひ人」を除ける事より称せし名なり

備具そなへぐ

勝手向の器の事を云

竹託たけだら

穀ものを納め置籠の事又

餉器くわき

椀の事なり

朝餼あさひ

朝飯を云伊勢国下宮と云も昔」ハ餼宮と云かれいを呈する所又

夕餼ゆふげ

ゆふめしの事なり

晝糧ひるあふふ

ひるめしの事なり

弱胃よわい

空腹の事又穀氣胃の腑に少」き事を云

塩梅しんばい

本朝のあんばいの事なり

干望被かみ

喰」 たんとあがれと云事なり

尿よほり

小便の事なり

入糞生につちうま

大便をするを云糞ハ糖に同」じ

速役來とふやくこい

後にきたれと云事

來ま於あニに交ま合あ徵あ

早まくこひと云ま事あ走あレあ於あニま真ま哀あ味あ」早まくこ行あけと云ま事

外そと限かぎ天てん

早朝の事なり

『園翁交語』と『八丈実記』の鳥言葉

代だい寫しゃ時とき
カワリツツルトキ

八ツ時より七ツ時にうつる頃を」云

餅へ體たい記き
アヘチカサコシガキ

今ハ背中アヘチカサの通称と心得」誤り用ゆ

病つく二都ふ胸むね目め
スヘテカミミメラ

からだの筋のいたむを云

噴く嗅く裏うら
クサミキオウラニ

はやり風を引く事を」云

身み熱ねつ
ミヒツリ

ねつあるを云 【以上ウ】

這は臥つ
ネツス

氣分すぐれず床に付を」云

目め淚なみだ

目ニ含を目淚と云訓なかるゝを涕」を出す云今ハ涙の通稱となる

返へ苦く理り
カヘスグルシ

噫いの事こと云

轉まぶる

本調にて立たるもの臥したるをまろ」ぶと云生たる人死ぬるも同意なり

盆ぼん參さん餉こう
ホシイリコフ

ぼんに神佛へ詣で賽錢の」代りに手向る米を云

棺くわん

はや桶の支なり

寺てら

持佛の衰し々し寺字詩曰名な浮屠所うと居皆曰い寺

夜や以い夕ゆふ

こんやと云所に用ゆ

鮫あ鱒ま

ばかになつて口をあいてつら」れる形容なり

飛ひ指し

人の云ことをうけぬと佛法にゆ」びをばしとあり

無ない似につけ付も によりもせぬむりなことに用「ゆ

古こ問と人 徳あり又さいあり古き宴に通「する人を云

出来マ きたれに用ゆ

今日けふ日 けふと云ことなり

法ほつ直ちき うそを言わすにほんどふに」と云所に用ゆ

禮らい手て おのれが禮手らいと續くに用ゆ「未熟をそしる言葉

被れ徒たらニ於にあつ阿戯あ あほふになつたと云

惑わ止やむ 悩むかほを云

坊ぼく主しゅ 淨家の衣色の形容詞也

糸いと引ひ 正月降水の婦人を形容の詞

陸りく積せき 祝日不快なるを形容詞

富とみ下くだり よき雨といふに用ゆ

嚙かむ語ことば俵たわ 口をきくことおふきを云

歸かへ留とど舞ま いそぎあわてるを云

眞まこと好よ太たい 心を用ひてなす所に用ゆ

日ひ通つう理り存ぞん いやしき召使を云

【以上廿一丁オ】

『園翁交語』と『八丈実記』の鳥言葉

作つくレ於お臆おそ微び　　おそれたかたちと云

怪知散下けちさんげ　　ふしぎが付たと云に用ゆ

可ま間合あひ　　人に物を好れて遺わさん」と云ふに用ゆ

滿能まんのぶ　　ひがまぬと云所に用ゆ

豊足ほうそく　　ふとりしものを云

立た盗魂たうたて　　ぬす人のまへ方じやと云所」に用ゆ

馬屋まや　　いにしへ馬を飼し頃の名なり」今へ牛家を馬鹿と云

耶蘇やそ　　いやだと云に用ゆ切支丹に」似たと云形容なり

一代卑倦いちだいひくわん　　其身一代の召仕を云又卑」官とも書すべし

雪院かんげん　　こふかの宴なり　　【以上廿二丁オ】

止と　　わかりかねて問かへすに用ゆ

尻臈しりげん　　ぬしきのことを云

噓送うそぞう　　へどをつくよふな逆氣を云

早乞はつこぎ　　はやくたのむに用ゆ

爲通採なとち　　物に穴をあける事なり
打う潰辨願魂へんのこたましきうちらふす　　大きにきもをつふしたと」云事

何天地百靈神

怪妄事にあふて大にま」よひし時惡口に云

於途交知己

ちよつとした交りにゆくとふ」して知りませうに用ゆ

討何考何亦

とふしてもこふして」もに用ゆ

斯世刻落

いかにもくるしんでゐた」なぞに用ゆ

斯世月日

いかいことの日かづといふ」事なり

善綱

人死て棺に附て送りの人忌を受」る厚薄によりて例を定る綱なり

着異紹

忌ある間だ身をはなさづ」着用す古例の服なり

二四樂

七日の物忌六日の夜社人祭を」なすいにしへの雅言なり

別添

社人に附添ふ囃し方の」人を云

借社人

雇ひ社人を云

苦練復矣

物をたつぬるに用ゆ

次に八行目に「本邦語辭」とあり、九行目から上下二段に左の語彙がある。

可愛 かわゆいと云

茶釜 ちやまかと云

相應 ふさつたと云

不相應 ふさらぬと云

止し とくまれを」ゆくことに用ゆ

動動 うこけと云を」とくまれに用ゆ

鑑 身をおほふものなり

甲 身のせなかに当るものを」頭に載くものに用ゆ

【とふして如何而】

【以上ウ】

指 いひと云

燈心 とうすみと云

【以上廿三丁オ】

鮭 しやけと云

紙燭 ひそくと云

夕部 ゆんべと云

餘 あんまりと云

問屋 とんやと云

御鬮 おみくじと云

瞽者 ござと云

次に一行明いて左の文章がある。

邊鄙の人言語の誤へ笑へからず唯文國のみ満足すと云べしそれさへも武備志には固より知る中國に失し」て是を四裔に求へ獨り西方の等韻のみにあらず日本」の尙書なりと見へたり此故か音の誤ある妄敷書に出す吾本邦にてハ音を用ゆ又訓を用ゆ世に是を重箱」よみと云音あり義あり華人是を誤るいわんや遠海離」島文辭乏しきをや吾本邦の假名ハ華人通し難き妄」必然なり何となれハ或ハ銚子長子丁子趙氏帳師町司【以上ウ】あるを此等皆假名にてハちやうしと書ときは何を以」其品をわかつ妄を得ん夫今オの字イの字エの字の儀」理委しくいへる如くに蜜細に盡し難きを知りてや明」魏法師ハいぬおをえゑを一に用ひしと云

『八丈実記』は赤野十二行宛無丁付で折目には「八丈島役所」と刷られた半紙袋綴の稿本計三十六冊から成るとされるが、吾人に関係するのは第参冊であつて表紙と同じく扉には「八丈実記 参」と書かれた右肩に朱印があり、三行に「東京府八丈嶋廳印」と読まれる。次に序二丁半分の末に

明治二年歲次己巳夏五月

前朝散大夫中臣則文 撰

とあり、一行明けて

此人者鹿兒島大宮司五位塙伊豆守中臣則文

櫻宇大先生也

と見える。次に自序一丁分、大意二丁分あつて末に

七十七翁 聞齊守眞

と詛されてある。(6)

是から紹介轉載す可きものは扉から算へて一四六丁ウから一五二丁ウまで計十二丁半の約二百五十語句物類十項であつて、即ち本冊の「人物」と「八丈島年中行事」に挟まれ、読易いが乱暴な字体である。以下の覆刻で原物の改行は「符もて細註割書の所も忠実に示す事にする。ソに。をつけた(ツオと読ます可き)もの数箇が散見する。

八丈方言

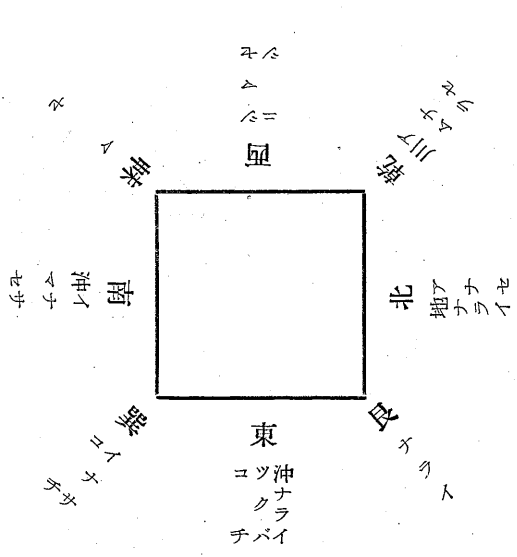
天 地

日月モ天道様 天ヲ テンネイ 地ヲ ミヂヤ
風ハ東ヲ イナサコチヌヒラナイ 巽ヲ サナガシ

『園翁交語』と『八丈実記』の鳥言葉

『園翁交語』と『八丈集記』の島言葉

南ヲ ミナミ
 西ヲ マニシ 申西ヲ ナツニシ
 酉戌ヲ フユニシ
 國地風ノ名ハ
 坤ヲ ナカシ
 乾ヲ カワムラナライ



【以上一四六丁ウ】

朝ヲ トンメテ
 晝四時ヲ コマヒル
 晝ヲ 九時
 兵糴時
 ヒヤウラ
 又ヒノマンナカ
 八時ヲ ダイサン
 七時ヲ

ダイサンサガリ 夕暮ヲ ヤヨウシマ又「ユウケ時 夜四時ヲ 子ドキ

太陽曆時刻表

午前零時	子刻 九ツ	一時	子半刻 九ツ半	二時	丑刻「ハツ」	三時	丑半ノ 八半	四時	寅 七ツ	五時	寅半 七半	六時	卯朝 六
七時	卯半 六半	八時	辰 五ツ	九時	辰半 五半	十時	巳 四	十一時	巳半 四半	十二時	午 九ツ		
午後一時	午半 九半	二時	未 八	三時	未半晚 八半	【以上二四七丁オ】							
四時	申 七ツ	五時	申半 七半	六時	酉夜「六」	七時	酉半 六半	八時	戌 五	九時	戌半 五半	十時	亥 四
時	亥半 四半	十二時	子 九										

人・倫

文化七庚午年末吉村年寄定右エ門ヨリ御代官「榊原小兵衛役所へ申立タル八丈島出生兒名ノ」覺云
 男子 太郎東司_氏、次郎、三郎、四郎、五郎、六郎、七郎、「女子_ヲアツバ_氏、ナカ、テゴ_氏、クス_氏、十郎_{トイロウ_氏}」
 如此一同心得通称仕候

父_ヲ 上ハト、サマ 母_ヲ 上ハカコウ 祖父_ヲ オウヂ
 下ハテ、サマ 下 ハア
 祖母_ヲ バサマ 親類_ヲ オヤコ 二人丸秘抄云「おやこ 親子_ヲ をやこ 親類ノコヲ云 兄_ヲ アセイ」
 兄人ヲ敬シテ 様ト云フヲ 弟_ヲ セイ 姉_ヲ アチイ 妹_ヲ (ケフダイ) 古書ニ 反正天皇ノ 伯父_ヲ
 アセイト云フ 阿ハ大ナリセイハ兄也 イン子 又オトオト 妃ヲ少弟_ヲ 嬪ト書ク
 チ 伯母_ヲ ベ 從弟_ハ イトコ 姪_ヲ メイヨウシ 妻_ヲ ゴセ 是ニハ 故事アリ 流人ノ女房_ヲ 水

汲」 忍ヒ女ヲ メカケ 妻トヲ トワリ

良夫ヲ 上ハ ダシナ 一 大家ノ妻ヲ敬シテ 今ハ アチイドノ 娘ヲ トノ 下男ヲ トリビツカン」 一人被官ト云ナリ

又從弟ヲ フタハライトコ」 老人ヲ コンゴ 牛カヒヲ トノリ 舍人ニハ アアラズ車馬ヲツカサドル下人ヲ云信人也」 長子ヲ 太郎

次男ヲジヤウ 三男ヲ サボウ 【以上一四八丁オ】

四男ヲ シヤウ 五男ヲ 五郎 六男ヲ ロクロウ」 七男ヲ シヂヤウ 八男ヲ 八ツチャウ 九男ヲ

九ツチャウ」 十男ハ 十郎

長女ヲ ニヨコ 二女ヲ ナカ 三女ヲ テゴ 鹿島」 手子ナリ案ニ手ヒク子家子ヲテゴ 四女 ヲ クス 五女 ヲ シイロ

ウ」 六女 ヲ クウルウ

幼女ヲ 惣名 アツパ 若キ女ヲ メナラベメナラ 又ヨケコヨケコハ美人也 孺ヲ タンゴ

當歳ノ小兒ヲ カタコ 孕婦ヲ ハラメ 父ナシノ」子ヲ ヤンゴ 馬鹿者ヲ ドンゴ 又孫六 小兒ヲ 悪口云フテハ」

ハラワタ 又コゾウ 小供ヲ褒メテハ 我子^{ワガコ}サマ 女子ナレバトノ」 サマ又 ホウシノタマサマ 【以上ウ】

人ヲ叱リ 又ソシ ミシヤキ 又テツチ

流人ヲ 中之郷^{ツニン}ニテハ クンヌ

名ハアレヒ呼バズ重ニ親ノ名ヲ添エテ男ナレ」バ 太郎助太郎 様ナレバ 大カリ女子 呼也 五郎クス様

女ノ名ニハ源氏名オ、シ ツリアイタル夫婦」ヲ提灯ニ釣金 又オマクアルハ女ノ名ニ

ボウ」 アド、トウス、タカリ、

昔ノ記ニハフツラ、アイチヤ、チツコムシ、ソウム」ツラ、マ、カヅラ、チジガチ、チイセン婆
或者江戸ブシトツチリトンニ作云 太夫重五郎也

八丈美並フシギカ多ボウズ天窓ガ丸クナシ」フドウ火炎ヲ背負モセズクスハ石ニモナリ
ヤセマイ紐ナキユマキノ落モセズ其クセミ」ゲタノオ、キサワ身持ノ腹ニ異ナラズ詞ア」ツタト地イ、ナガライヤ

ナ男ヲフリツケル

支 躰

頭ヲ ツムリ 鬢ヲ ミチキ 眉間ヲ ナツキ」脊ヲ ヘダカ 膝ヲ ツグメ 足ヲ ハギ」跟ヲ ケ

イブシ 外ケイブシ 内ケイブシ ロヲ ハゲタ」臍ヲ ヘツゾゴ 指ヲ イビ 掌ヲ タンブ又 手ノ皿」齒ヲ スカバ 髪ヲ

ツブリノケ 中之郷ニテハ カシヤガイ」髭ヲ ホウヘゲ 三口ヲ トンジャウ 玉門ノ毛ヲ ヘゲ」陰汗ヲ イジル

台背ヲ シヨツケラ 陰部 毛ナキヲ 【以上ウ】

ホウロク 交合ヲ ヘンコノスル 又 コスル 身ノ毛立ツヲサン」バラゲ 涙ヲ メナダ 大便ヲ ニット 小便ヲ

ヨーツパリ 死ヲ マロブ

衣 服

衣類ヲ ヘビラ 美服ヲ マダラ ヨケヘビラ 古着ヲ ホロ」帯ヲ ヨビ、下帯ヲ ハダヨビ 裂ヲ カコウ」オシ 衤

ヲ オクミ ノボリ 襟ヲ クビエリ

飲 食

稻ヲ タブ 粥ヲ イ、 味噌ヲ ダシ 肉醬ヲ シウデ 又 オマワリ 【以上一五〇丁オ】

家 居

大家ヲ ボウヤ 小家ノ石ニテ ボウエ ヤカタ 雪隠ヲ「カンジヨ 天井ヲ アマ 屋棟ヲ ツベ 桁ヲ ソ」ウ

垂木ヲ タレゴ 階子ヲ アマバシ 納戸ヲ「チャウダイ 流シモノヲ スガキ 石垣ヲ オリ」門

口ヲ カド又 イシバシ

器 財

飯椀ヲ ゴキ 膳ソロウヲ 「カゴツ」 煎鍋ヲ 火「取鍋 篩ヲ モグルシ 德利ヲ 「クリ 鉢ヲ

カ」鎌ヲ マガマ 薪ヲ モシキ 柴ヲ ゴミ

動 物

牡 ゾリ 牝 バメ 犢 ウシヨコ 犍 マダラ牛 【以上ウ】

牛ノ名 コニヤク牛マダラ牛赤牛アメ牛アカマダラ、ヘイゴアメ 八丈島ニテ牛ツカウ詞 左へ行クヲテイ、右へ行クヲベイ 止ルモベイ セジロ牛 白キモノ也 ヒタヒ白ヘイゴ色アカコニヤコ、星デキ

八丈ニテ牛ヲ養フニハ春二月三月頃ヨリ初メ」テ西山ノ牧ニアル牛ヲ捕テ家ニ飼ナリ其牛ヲ」取ル中間壯健ノ者ニ

十五人組テ在ルナリ

猫ヲ カン 鼠ヲ ヨルノ人ヨルドリ 石籠子 イケ「ピヤウ 蜻蛉ヲ ヘツゾ 蜻蜓ヲ オニベツソ」 赤卒ヲ アカトシボ

青ヶ島ベツソ 蝶ヲ ヘイル 蟬ヲ クツカ」ワシ 蜘蛛ヲ クボナ トウヂニザル

魚 ヨ 鯉 カトウ 鰯 シヨゴ 蟹 ガリマ」雀 ツツメ フクロウ ック 【以上一五二丁オ】

言語

往ヲ イコロ 先マテヲ イデミ イヂルナヲ イ「ロウナ 本心拔ルヲ ホジヌケル 本當ヲ ホツチキ」

ヒサシブリヲ ヘイテイ トウダカラ ドコンデ」 ソロソロヲ トウヤク 男女ノヤキモチヲ デンキ」 ダマ

ツテイコロヲ オツタラ カシコイヲ カドクナル」 イカニモヲ カンダラ 喰ヲ カム ニホウヲ カ「マツテ

草臥ヲ ケイダルクツテ ジツトシテ」イロヲ ヨウラアル 腹ノヘルヲ ヨワクツテ」イワレナク人ヲナブ

ルヲ ヨウナシニ人ヲイロフ」美麗ヲ ダイジイ 物ヲクレヲ タモレ フゼイ」ナキ良ヲ ヒヨツツゲ タントア

ガレヲ 大賀郷ハ 【以上ウ】

ゾンブニアガレ カクスヲ ナフス ドウダカ」ヲ ウソヲシテ ツマラスヲ ウタテシク アイ」ヲ オウ

三根ハシヤフブアガレ イタムヲ ヤメル 寐ヲ ヤドル 病ヲ」ヤンデ 灸ヲスルヲ ヤヒヲヤク マツスクヲ」 マンノウ ヤワ

早ヲ マアニ 人ニ喰ヲ マイレ」 失ヲ マヂレル 人ニ物ヲヤルヲ モウセル」鳥ノ舞ヲ マク ソウダツケヲ

マグウニ 高直ヲ」ゲヂキ 珍キヲ チチイ キタナキヲ ブシャウ」 マコトニヲ マグウニ 不淨ヲ 大賀郷

ゴドラク」ジドラク」 ダマスヲ テレン モノイフヲ デヤク 手ヲ付」ケルナヲ 手イスナ ドウシヨウヲ アダニシタ

ラ」ワルイコトヲ アシケコト イソイデヲ キルンデ 【以上二五二丁オ】

近所ヲ メグリ 正五九月島中ノ神社ニ詣ルヲ」メグリ 外聞ワルイヲ ミヂメニ 低ヲ ミヂヤク」 ザマヲ

ミロヲ シヤアイ 知ラヌヲ シヨクナケ」 知ルヲ シヨケ 大デヤクヲ シヤ「ク」 家ノヤケルヲ シヤ「ケル

ソコロノケヲ シヤレ」沢山ヲ エラバク 一二度手間ヲ シツクリケイガリ」モチツトヲ エラコシ ナンノ事

『園翁交語』と『八丈実記』の島言葉

ダラ ヒヨンゲン「オ、クラ モオニ 少ヲ コシ シヅカニヲ セツコリ」ソウデナイヲ ヨモヨ 物ヲ片付
 ルヲ ヒサメル「メンドウヲ エジイ 約定チガヒヲ ハグラカス」イヤダヲ アンセイ ガンチヨウ 古語也
人ノ強盛

此外數多シルスニイトマアラズ

【以上ウ】

右語句は実記卷廿の十九丁オから廿五丁ウに互つて重出してゐるが、此の方には言語部終に約四十語句が追加されてあるので左に是を掲げる。

二度手間ヲ、シツクリケイグリ、雨ニヌレルヲ、ヒンタラベイタ、ナンノ事ダヲ、ヒヨンゲン、オ、クラ、モフニ、

シヅカニヲ、セツコリ、咒咀返シヲ、サヨウヲ、コウダヲ、ソウデナイヲ、少ヲ、コシ、一在所ヲ大賀郷ハ

サト、三根ハサワ、末吉ハコウチ、飛峯カトオラ、土洞久、ダマスヲ、ヌカス、物ヲカタヅケルヲ、ヒサメル納、

泣ラベナル、落センモノヲヒロフテカヘスニ、ホウヒヲクレト云フヲ、名句ヲクレ、子供ヲシカルハ、ナレ、

メンドフヲ、エツイ、マチガフヲ、ハグラカス、片足ニテ歩行ヲ、ケツケンジョウ、承知ヲ、ウンドナ、

人ノ來ヲ、上ヲジャリヤツタカ、中ヲシヤラフカ **【横四行シヤツタカニ行目】** コイヲ、オジヤレ、モツレタヲ、

オドラニナル、クレロヲ、上タモリヤルトヤルヲ、ケルワヨイ、クサヒヲ、カマル、イヤダヲ、アンセイヤ

ラヌヲ、ケンナカ、人ノ婦ルヲ、オクリテハ上オジヤルト 驚ヲ、キモヲツブス ヨカツタラヲ、ヨカラ、

ソウサヲ、カンダリヤ、ナヒヲ、上オジヤリナカ下ナツケケゾ マ、ヨヲ、又堪忍シロ 寐ヲ、ヤドル

又ケンナフゾ 下タモルト 中ナツキヤナ 下イケ 又ケンマイ

記憶す可き明治三十三年十一月「言語學雜誌」第壹卷第式・參・四・七・拾号の保科孝一翁が「八丈島方言」と一世代を隔てる明治書院『國語科學講座』昭和九年四月の『本州東部の方言』五十余頁の東條操氏「關東方言」第二章「伊豆諸島方言」特に「三」文献書目に「園翁交語」享保二年とあるのは（最近はは一世紀後の享和二年即一八〇二年の間違と認める迄）自分を当時感激させたものであつて、此の佳作に尙りたい意図で自分は聞書だけで昭和十五年四月『旅と傳説』第十三卷第四号へ未踏不聞の「吐喝喇諸島方言」を發表し、而も同趣文献皆無に嗟嘆久しうしたのであつたが、最近対馬探訪で同様古資料を發見本誌第四十輯へ紹介したのはせめてもの慰であつた。

国立國語研究所力篇『八丈島の言語調査』昭和廿五年三月刊菊判四百余頁に接して、その附録ⅠのⅧ「八丈島の文化と文獻」を繕いては前記資料に次で珍重す可き七十年前『八丈実記』所收方言も序に筆録發表の必要あるを痛感した。

2

昭和廿六年五月終戦後二度目上京に当り十九廿日上野公園国立博物館講堂での入学会連合対馬共同調査報告講演会を済ませて、廿三日夕五時月島発の東海汽船二百二十噸藤丸に四半世紀愛用小型トランクと洋傘とそして是は矢張もう心配するに及ばなかつた白米二升と勿論必要だつた弁当二食分を携帯して乗込んだ。本船には等級差別無く先着十八名迄別室指定席が用意されており、自分は第三枚券を得て終夜体を伸ばせた。波頗る穏かで黒潮にも酔はず但し船脚極めて遅く、翌廿四日明方左舷に三宅御藏島を眺め昼過一時半八丈富士と小島とを正面にしつゝ漸く三ツ根村の神港着、船で最初耳にした「素晴しきや」はやがて数分後バス内で洋装バーマ乙女達の洩らした「良きや」と共に九州方言を早くも聯想させる郷土味であつた。予て九州島原の山本靖民氏に紹介されてあつた村長の小宮山俊一郎氏宅を尋ねて面談、東京旅館へ御世話願ふ事となつた。直に徒歩卅分で大賀郷村の東京都八丈支庁を訪れ総務課長池田要太氏に挨拶して予め学校から郵送しておいた方言古写本筆録の許可証の引合せをした。翌廿五日同村東端の三原館（菊池旅館）投宿、翌廿六日午後一時発バス卅分間で檜立村へ着いて笹本旅館（半農家）投宿迄に前記二方言集は丁度御留守の支庁室で長閑な鷺声を楽しみつゝ鉛筆で書抜いて了つた。此の日郵便局告知板に廿八日東京発の黒潮丸は廿九日大賀郷村の八重瀬港着。着港一泊翌夕でなく当日夕直に離島出帆する意味であつて某人はエリダシと言つてゐた）と發表され、種々な都合上自分は大喜びした。廿七日朝発バス十数分で中之郷村着、

大洋旅館投宿終日引籠つて室内の婦人雜誌耽読、但し風速十五米の雨となつたので可なり心配もした。廿八日午前八時半バス（是は日一回）九時に末吉村着、東屋旅館あづまに泊り、八丈も此処迄来ねば気分が出ぬとかで八丈節一名シヨメ節も館主に二三回聞き黄八丈の丹前夜具も身につけ、為朝遺蹟は敬遠しても訪はずに帰れぬ丹那婆へ南洋には数多いが日本内地では例無い母子交會伝説の始祖）之碑を野中の紅鷲躑躅群咲く辺へ頼も恐れず下駄履で踏込んだ。土地児を「島の人」と呼ぶが内地人を「国の人」と称し総計今や老万参干は徑三里と二又は一里の本島五村と極近い小島二村そして遠い青島（更に鳥島）とに分れ、小笠原諸島住民は八丈人が大部分を占めてゐる。長髪婦人はもう殆ど見られないが男女共頬肉隆起と眼差は直に氣の付く特徴である。古の罪人ソウジンの子孫と云ふ僻は全く感じられない眞に明い新しい大東京都の奥庭別館であつてラデオ映画は電話新聞共に便宜あり原爆から免除祝福されてゐるとさへ思はれた。廿九日朝早くも郵便局告知板で黒潮丸は本日來島するが（風雨にも不拘）離島は矢張定期通り三十日夕方大賀郷村の八重瀬港出帆と急変（瀬積出の為）と知つて失望する。午前九時末吉発バス（日一回）で十時大賀郷着、大脇旅館は満員ではあり前の喜久地旅館へ行く。此の日の午後から翌日夕迄は全く無聊に苦しんだが、それでも生れて初ての牛乳風呂に浴したり三根村村役場に前記村長を尋ねて姻戚に当ると云ふ島出身の北海道林業で当てた新興一億長者の成功経歴抱負計画を傍聴したり話題は相当あつた。三十日夕六時八重瀬港発五百噸黒潮丸は生憎乗客夥しく蒸暑さと狭苦しさに辟易し奮発して辛くも二等室へ居直る。「さん候」はもう聞けないにしても抜錨時に見送りの解で若い洋服男のハンケチ振つて発した別離挨拶「思ふわよー」は是こそ一週日五千數百円を費した自殺強盗の無い極樂島最後の土産であつた。復航亦頗る安靜であつて往路見落した大島三原山上火光も同時刻午前一二時の間に左舷窓から望見し、三十一日朝七時半月島着。かくて宿願を果し得たが、丁度意地悪くも離京一週間（月六回航）に亘つて三越本店で開催されてゐた南方熊楠氏遺品展覧会は全く掛違つて思ひ掛けない好機は矢張自分には縁がなかつたのだつた。

六月二日午后神田美土代町 Y M C A 地下食堂で日本音声学会廿五周年記念論集『音声の研究』第七輯五月出版祝賀会には大西雅雄博士の斡旋で予定通り第九一回研究例會発表の形で「八丈島音声の特質」を自分は講演、神保裕会長以下十數名出席、平山輝男教授の十數年前曾遊比較談も興味深かつた。此の土曜晚九時月島発の橋丸千八百噸で約二千乗客に混つて自分

は甲板横臥翌朝五時に大島岡田村上陸、直に龜山旅館で朝食して弁当を作らせ、バスで泉津村到着、索寞たる大島公園から伴も無く登山して湯場經由午后二時三原山火口内輪に達し（名物の駱駝は戰時殺されて今は馬があるが高いし乗るに及ばぬ）、表道から元村へ下山してバスで夕五時に規模小さな波浮港村着、甚の丸（船名）旅館投宿、翌四日午前九時発バスで十時元村着、測候所参考館へバスで往復してから午后三時元村発菊丸千二百噸で帰途につき、此の航路（毎日往復）の半を占める東京湾の廣大と佳景に驚き樂みつゝ夜八時半二千円旅行を終つた。東京に最も遠くて最も東京化した八丈と凡て逆に此の略同大六村一万五千人の伊豆主島（八丈の一倍半）は水に恵まれず女が重労働する所迄好対照をなし、催促番に手拭前掛姿のアンコ（姉児）は西の大原女と共に永久に曳杖者を喜ばす地方色であらう。

3 「明治十九年十月寫之」とあるによつて且又罫紙に「八丈島役所」の刷込あるにより、是は勿論原本ではなからうが今や唯一根本資料の地位にある。「八丈島語」の副写は国語研究所にあり、前記言語調査附録2のⅢ「語い集」には五十音順にして他の同種資料（原本は内閣文庫や国立国会図書館上野支部にあり写本は国語研究所にある）と共に整理配列されてある。

4 著者高閔慎は前記言語調査二七三—四頁解題に依ると、三根村の高橋宗家三世長兵衛為栄の四男として宝曆三年（一七五三）出生、十八歳で江戸に出て呉服商を営み旗本出の妻の縁故により柳營の奥迄八丈織を商つた云々はともかく、此の人と与一とを同一視してゐる点は如何かと思ふ。支庁写本の関係箇所即する限り与一は原著者の孫に当る様に讀取れる筈である。

5 原本は東京都庁所蔵ではあるが目下無事焼残つてゐるか否か不明。日本民族学会長の澁沢敬三氏は昭和三年頃四部を謄写複製配布されその一組は今も氏の祭魚洞文庫に見られる。此の中の「八丈方言」は国語研究所の大田栄太郎氏旧藏方言書一束拾万四購入物にも副本があるし、前記言語調査附録の2Ⅲ「語い集」にはアイウエオ順に組入れてある。

6 開斎守眞は近藤富藏の事であり、幕末勇傑の一人たる重藏守重の長子に当る。隣家百姓一族七人を斬殺して文政九年廿二歳で遠島申しつけられ、島で宇喜多秀家（関ヶ原役で流された）の子孫を娶り三子を挙げ、明治廿年（一八八七）六月一日八十三歳で歿した功績は前記言語調査二八二—六頁にも記されてある。

わたしや大島 御神火育ち 胸に煙は たえやせぬ

——大島節——

第四十一輯 補 正

九七頁 瓠と種子は白（吳レ系）に改める（上村孝二氏^{かみ}教示^{たか}）

次輯以下連載予定

イファン・マリークの千一行詩亞語文法